

～水にとぼしい知多半島～

大きな川を持たない知多半島の人々は、水不足に苦しんでいました。

特に1947年(昭和22年)は、大干ばつたいかんになりました。

農家の人たちは、ため池から田んぼへと水くみの仕事を一生懸命いっしょうけんめいに行っても水は涸れ、お米はほとんどとれませんでした。

水不足は農業だけでなく、毎日の生活にも困るほどでした。



はねつるべで水をくんでいる様子



井戸で水をくむ人々



このとき農家の久野庄太郎くのしょうたろうさんは考えました。

木曾川の水を
知多半島へ引いたら…

久野さんの熱い思いから、愛知用水を造る運動が始まりました。

豆知識

毎日水くみ!!



知多半島の師崎しづきでは飲み水用の共同井戸がひとつしかありませんでした。共同で井戸を使い、水桶みずおけなどを持って毎日水くみをしました。

こんなことわざも…

「知多ちたの豊年ほうねん米くわずこめ」

知多半島のことわざで、知多が豊作になるほど雨が降れば、他の地方では水が多すぎて凶作となり、米が食べられなくなるという意味。知多半島はふだんから水不足で悩まされていたということです。

久野庄太郎さんはこんな人



知多郡八幡村やわたむら(いまの知多市)生まれ。自らの資産を投じて愛知用水を造る為の運動ためをしました。久野さんを中心とする地域の熱意が愛知用水を造ったといってもいいほどです。